

受け継ごう 先人の思い 語り継ごう 次世代へ
『もったいない』で再生する地域の絆

浜田市立白砂公民館

1 浜田市立白砂公民館の概要

県内屈指の西条柿の生産量を誇る地域にある。平成 9 年度開校の三隅小学校に統合されるまで白砂小学校として地域で守り育てられた跡地に開館して 11 年が経過した。世帯数 114 世帯、人口 319 人、高齢化率 31.1%、年少人口 29 人と、浜田市三隅自治区でも最小の地区である。

2 事業の概要

(1) はじめに

①実証事業名 『もったいない』で再生する地域の絆

②実証事業のテーマ 受け継ごう 先人の思い 語り継ごう 次世代へ

③実証事業のねらい

地域の特産西条柿が、高齢化や生産人口の減少により収穫しきれず廃棄になるなど、先達の歴史や思いを知らない世代が増えている。また、相互扶助機能の低下から、特産であることへの「誇り」やまちづくりに対して他人事ですませてしまう風潮を、「もったいない」で再生への絆を深め、地域づくりを進める。

(2) 具体的な取組（内容、活動状況 等）

①柿渋のもつ魅力の復活 ～渋柿を捨てるのは『もったいない』～

生涯学習推進セミナーとして開催している「柿渋の仕込み」も 3 年目になり、新人研修を行えるまでになった。和紙会館とのタイアップにより、柿渋と和紙を使った事業の展開が新鮮なものになった意義は大きい。

今年度は小学校教職員研修として参加していただいたことで、学校現場へ「西条柿」の新たな魅力を発信することができた。



②熟柿だって捨てたものじゃない ～真空保存で活路を見出せ！～

事業の本丸とも言える「真空保存機」購入により、熟柿をはじめ季節の

野菜や果物、はたまた自家製の漬物やドレッシング、とんど焼きに使うお餅や茎わかめの酢物など、何でも試してみようということで、真空保存を積極的に行ってもらった。既存の「文化祭」や「餅つき交流会」などの事業の時や、「ミニデイ」など通常の公民館利用の機会を活用することで、交通手段のない年齢層の方々に広報することができた。

また、中学校の職場体験で、「地域力」醸成プログラムの意義を伝えることができた。学校側からは「ふるさと学習の集大成として生徒は地域の思いを感じ取ることができた」と、感想をいただいた。



③誰もがチャレンジャー ～柿酢づくりへの第一歩と試食会の提供～

見向きもしなかった熟柿から柿酢を作る。どんな風にもできるか誰にもわからない。期待と不安の入り混じる中、柿酢を仕込んだ。今年度は異常気象により「柿まつり」が中止になるほどであった。出荷の柿が無い分、熟柿もなく仕込む材料調達に苦労した。苦労の甲斐があり三つの点に成果があった。一つ目は、生涯学習推進委員の意識の高揚がみられたこと。二つ目は「柿はかせになろう」という児童の熱い要望に応じて柿酢を使った新たなふるさと学習を展開したこと。三つ目は、自館他館の事業を問わず柿酢を食材として使ってもらうことにより、「集まって」「試してみよう」「広めよう」の気運が盛り上がったことである。



3 事業の成果と課題

成果については、前述の具体的な取組のところで触れているので、今年度の活動から見えてきた課題を述べるならば、

今年度は、試作会に傾倒した感が強いので記録を撮りながら、資料化していきデータ作成の広がりにつなげることがあげられる。

①柿渋は静かな需要があるので、作り方の研修会を継続する。広報次第で仕込みも工作体験もバリエーションに富んだ企画が打ち出せる。

②塾柿だけでなく「真空保存機」を有効活用して知識や生活の知恵を継承していく機会を提供する。熟柿については、食品衛生に関係するので専門機関との連携を強化する。

③柿酢を素材として、家庭の伝承力、家庭教育につなげていくには、学習した人が（男性でも、子どもでも、高齢者でも）次の人へ伝授する地域講師になっていく機会を作っていくこと。その場限りにならないことが見えてきた。

4 今後の方向性

生活の生業の中で活動し続けることができるひと・もの・ことが、当館には「西条柿」で存在する。焦らず地道に、しかし、まちづくりの気運とタイミングを見計らって事業を推進していきたい。

